

合に僧侶に多く、宗教畫の粉本は唐土傳來のものゝみであつたから、倭繪といふべきものはまだ發生しなかつたと思はれる。然るに、延喜以後所謂藤原氏專權時代に入ると、華奢の世風が益々増進し、大に賞玩的繪畫の發達を促すことゝなつた。従つて先づ屏風或は障子の畫の需要が著しく弘まつた。その畫の題目は、勿論種類が多かつたが、數例を舉げると、『今昔物語』に「延喜天皇、御子の宮の御著袴の料に御屏風を爲させ給て其の色紙形に……小野道風と云手書を以て令書給、……春の帖に、櫻の花の榮たる所に女車の山路行たる繪を書たる所、云々」とあり、また『古今集』等の歌の詞書に「水のほとりに梅の花さきたるかた」、「あれたる宿に人きて花見たるかた」、「竹に雪のふりたるかたある所」、「人の家に松のもとより泉出でたり」、「淀のわたりする人ある所にほとゝぎすかける」、「網代にもみぢ多くよれる所」、「飛鳥川」、「八月十五夜前裁うるたる所」、「菊をもてあそぶ家ある所」、「志賀の山越につばさうぞくしたる女ども、紅葉などある所」などあるのが、それであつて、その一二を除く外は、何れも延喜・天曆時代のものに係る。此等の畫題によつて、その畫の手法の如何は勿論わからぬが、多くは日本の景物を描いたものであるといふことは大概想像せられる。現に淀とか飛鳥川とか志賀などゝかその地名を指定したものとさへある。日本の景物を描くことが多くなれば、従て手法の上にも漸次に唐風を變化して行くやうになるのは自然の趨向である。延喜時代の畫界の大家巨勢金岡は、その遺作として十分に信すべきものは一もないので、畫風の如何を確には知ることができぬが、幾分か從來の唐繪の風を日本化して一種の新調を創め出したのであらうと考へられて居る。

(次號續掲)

衣服の話

(大正六年七月廿一日東京文科會員會合の際における講演の概要)

菅原教造

衣服はいつたい寒暑いづれかの爲のものである。それで之に熱帶式、準熱帶式及び北方式の區別をするが温帶といふ様な中間の場合の衣服は認めないのである。熱帶では衣服と云つては用ゐない、只だ帯の様な物を巻きつけるので、今日印度人にみる所である。準熱帶では風呂敷の様なものを巻いてゐる。それが北方へ來ると身體の形通りの物を着けるので、所謂洋服の如き、大工・左官の仕事着の如きこれである。

衣服發達の順。人類としては衣服は熱帶式、準熱帶式、それから北方式と次第に進化して來た。之は人類が熱帶を故郷に持つ故である。また地球の水時代と氷時代との間に極めて温暖な時代があつたが、今日西班牙のアルペラクループの洞穴中の壁畫を當時の風俗畫と稱してゐる。實に二万年前のことだが、之に就いて見ると男子は裸體だが女子は上半身に衣服を着けてゐる、即ち熱國に於ける衣服であることは確かである。同時に人類が此時既に裝飾的に衣服を用ゐてゐることが察せられる。しかしかうゆう遠い時代のことが今日の參考では無い、吾人の今日の材料は準熱帶文明國の衣服なのである。それには東洋では印度、西洋ではギリシヤ、ローマが最も、材料を與へて呉れる。エジプト、古代ローマは前者程明瞭でないがそれでも繪畫彫刻又は歴史等に依つて研究することが出來ないことは無い。それも推定に過ぎないけれど。ギリシヤ、ローマ

は演劇上可なり知られてゐるし、又印度は佛教の關係上都合のいゝことがある。今日は此印度、ギリシヤ、ローマの三國に就いて述べたいと思つてゐる。

爾來地中海を本舞臺としてゐた歐羅巴では、ギリシヤ、ローマの影響が大きかつた彼のローマの大統一後その準熱帯の風俗は北方蠻族を征服して彼等の衣服に著しい變化を與へたのである。今日三越の少年音楽隊の服装はスコットランドの風であるが、あれなどは確かに熱帯式のものである。ズボンの様なものは用ゐてゐない。いつたいシャツズボンの如きはケルト人の風で、靴も北方蠻族が用ゐるはじめた、南方式はバクバクしてゐる。フロツクは上の方は北方式で下の方は南方式だ。婦人の服も同様で下の方が南方式なのに上の方は北方式らしい、日本服は準熱帯式を少し複雑にしてゐるが大體に於てこの熱帯式が日本服の特長を作り根本的中心となつてゐる。

又趣味の上から考へると衣服に就いて次の四目を分つことが出来る。一、衣服の形體、二、運動、三、模様柄柄、四、色彩であるが、其中今日の主問題たるものは第一と第二とである。第一と第二とは當人の活動ぶりに就いて極めて正直である。

南方の衣服が風呂敷的であることは既に述べた。而して北方は煙突的である。我が日本にはこのいづれもが入つてゐると云へる。支那の長袖とは日本の如く下に長いのでなく幅がひろいのである。日本にはこの風が來ないで下に暢びて地につかうとしてゐる。芝居の御姫様の帶の如き。かうなると日本服は表情の一として大切なものとなる、その衣服の運動が當人の表情を誇張する、洋服の如き北方式煙突的のものは形は明瞭に出るから細い形狀を現はすのに都合がいゝやうなものゝ、餘りに露骨なのは見て快いものではない。

さてギリシヤ、ローマに於けるこの南方——準熱帯式の衣服にどんな歴史があるか。

ギリシヤに先づヒトンがあつた。下着である、組織は單なる布に過ぎないがこれに二種ある、即ちドリア式ヒトンとイオニヤ式ヒトンで後者が地に垂れる程なのに比し前者はすつと短い。又ヒトンに帶を用ゐることがある、猶布の上の縁を表に持過して多少の裝飾とすることもある。このヒトンは右肩上でポタンでとめるだけであるが、労働者等はこの布の角を去つて片肌脱の形を取る、エキゾミスと云ふ、演劇の天使の服装である。

ギリシヤ歴史以前ホーマー以前の貴婦人はペブロスと云ふものを着てゐた。長いヒトンの上に三分の一程打返した布をまどふので、彼のデユピターの妃のデユノーが之を用ゐてゐる。

又有史以來ギリシヤの軍人旅行者はヒトンもドリア式の短いものゝ上にヒュミラスと稱する物を着てゐた。恰もマントの四角の様なもので、近世のマントの始とも云へやう、時には右肩で合せる所をすらして其裾を上にはね上げたりする。猶今にも繪でみる所である。一體着物は簡單な程着難いものであるが、之なども着方の最むづかしいものである。

着方に依つて極めて美しいのはギリシヤの國民服たるヒマチオンである。これは國民以外の者が着する事を許されてゐなかつたが、なほ多くの人類をして着用を切望せしめたものだ、ヒマチオンは幅三ヤール丈二ヤールと云ふ大きな方形の布で、四週に錘が附けてある。(この錘は多分金屬であらう)曾て日本でも芝居で女の帶の端に附けた例がある。このヒマチオンの着方でその人の階級が推量られたものでどの位か美しく見せたのである。

彼のギリシヤに於けるヒュラミスは、ローマに入つてラケルナとなり、それからサグムとなり、更にバルタメントムとなつて軍時の大元帥の用ゐるものとなつた。ラケルナは吾人の羽織の如く、マントの如きものであつた。サグムは一般の輕服、バルタメントムは緋の華麗な軍服であつた。

ヒマチオンはローマに入つてバラ、ストラとなつて婦人の着る物となつた。當時ローマは華奢を極めた頃であるから、之なども随分立派なものであつたこと、思はれる。

ヒトンはローマに入つてチユニカとなる。

ローマ特有の衣服はメトガである。國民服であつた。其の直径が身長に當る大きな圓形の布である。之を着るのには淺く半圓を打返して、折返した線の兩端に錘を附ける、シーザーもブルタスも之を着て活動したのだが、それには下にヒトンを穿る習がある。着悪いことはギリシヤ服にまさる。

印度の衣服は細長い帶様の布から發達した。總て朽葉色である、特に表裏上下の區別をやかましく云ふ。

この他、袈裟(衣)がある。日本・支那と異り袈裟と衣とは同一なのである。袈裟の種類があつて、三條・五條・七條・九條・十三條・廿五條であつて數の増してゆくのを尊ぶ。之は檀家の寄せる布を接ぎ合すのに依つて各通を生じるのである。そして其の接いだ所が田の字に似てゐるので、また田相とも云ふ。

別に標本に就いて實際の場合の着方を示された

ヒトン、地質麻布、左脇から持つていつて右肩の上でボタンで締め、左手を出して左肩の上で又一つとめる。其時巧に襷を取らなければならぬ。ヒトンを外に折返すミアプロイスとなる、折返した先を裾に錘を附ける。

ヒュラミスはマントの様に着て右肩の上でとめる。

ヒマチオン、地質毛織、三ヤールの幅の一端をさしこいて左肩より前方に垂らす、他端を握りて襷を巧に附け右手を包んだまゝ、左肩にしこい

てから掛ける、若し手紙等を書かうとする時は右手を出して手の下から布を左肩にかけるのである。外出の時は頭にも掛ける、女中等は物品を之の端に包んだ、即ち衣服にも帽子にも風呂敷にもなつたのである。

トガ、前に述べた様に其の直径が身長に三倍に當るさいふ大きな圓形の布だが、これを着るのには淺く折返して折返し線の兩端に錘を附ける、そして折返した方を外に、一端を左肩前から前方に持つて來て地につく程に垂らし、他端を右手の下から左肩に掛けるのである。猶胸の所に前に左肩から垂らして置いた布をチヌスと云ふ。

印度のケサ、一端を右肩にかけ右手を包んで他端を左肩に掛ける。

猶彼のトガに就いてのことだが、トガは禮式の時には頭にかけて着るのである。又官吏の着物は折つた折目に色の筋を附ける。但し葬式の時にはかくす。

ローマの皇帝はパープルー牡丹色である——のトガを着ることになつてゐる。シーザーがポンペイの議事堂で刺された時、彼はこのトガを少し長目に着てゐたこと云ふことである。(文責在幹事)

□間 一 髪

尋常一年の毳入競争が終つた。審判者は赤組と白組とを相對して整列せしめ、其の真中へバスケットを下ろした。

幼い彼等の頭がキチンと一線をなして、小搖ぎだもしない。審判者は先づ白のバスケットを取りあげた。白い毳を一つづつ取り出すにつれて、白組は一齊に一つ、二つと數へ進んだ。幼い聲は緊張に震へて、幾十人の發聲時間には一髪之差もない。次に數へた赤組も亦全様であつた。白は二十七を、赤は二十二を數へた。

まづ、白組が拍手した。次に、赤白一齊に拍手した。

相對した二列が、張りきつた禮を交換した時、私の眼に熱い涙がにじんだ。

私は此の終日、自己の能力の限界を明に商量する時の痛ましさを、大小に拘らず、其の限界を盡し得た人の貴さを思はせられた。

文 一